

家族計画普及と性感染症予防の両立は可能か？

小杉 穂高 2018 年度採用（6 期生）

修学機関：東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻 博士後期課程 1 年次

研究課題：Efficacy of a couple-based counseling on dual-method use among HIV-negative seroconcordant couples in Siaya county, Kenya

略歴（こすぎ ほだか）早稲田大学人間科学部卒、オーストラリア国立大学から開発学（ジェンダーと開発）修士号、東京大学大学院から国際保健学修士号を取得。2014 年より青年海外協力隊としてケニアに派遣され、HIV の予防啓発と衛生改善事業に従事。2018 年から外務省主催平和構築人材育成支援事業の海外研修員として UNICEF ウガンダにて公衆衛生事業を担当。現在、東京大学医学系研究科国際地域保健学博士課程 1 年次に在籍し、アフリカにおける HIV 感染リスクと避妊法に関する研究に取り組む。

博士課程への進学

私は大学院で開発学を学んだ後、青年海外協力隊としてケニアの地方保健事務所に活動しました。その後、国際保健分野の専門性を身に付けるべく、東京大学大学院にてケニアでの活動中に問題意識を持ったホルモン投与避妊法と HIV 感染リスクに関する研究に取り組みました。

HIV 感染が深刻な問題となっているサブサハラ・アフリカ地域では、家族計画を目的にホルモン投与避妊法が広く普及しています。ホルモン投与は避妊に最も効果的な方法であるものの、この避妊法はコンドームと異なり、HIV 等の性感染症を防止できません。ケニアで実施した修士研究では、避妊と性感染症予防の観点から理想とされるホルモン投与避妊法とコンドームの併用（デュアル・メソッド）は一般的に用いられておらず、さらには、ホルモン投与避妊法を利用する女性の多くが、コンドームを使用しない傾向があることから、女性は性的パートナーを介した HIV 感染の危険に晒されていることが明らかになりました。

博士課程では修士研究を拡張させるべく、FASID 奨学金プログラムの支援を受けながら、同地域でホルモン投与避妊法を利用する女性とそのパートナーを対象としたデュアル・メソッドの利用促進を目的とした介入プログラムの効果を検証しております。これまで HIV 感染が深刻なサブサハラ・アフリカ諸国におけるデュアル・メソッド利用促進に関するエビデンスは限られています。また、パートナーの理解と協力がコンドームの使用に不可欠である一方で、これまで女性とそのパートナーの双方を対象にした介入研究は実施されていません。従って、本研究は、ケニアにおけるデュアル・メソッド利用促進プログラムの介入効果を検証し、家族計画普及と性感染症予防を両立し、女性の生活の質を向上させるという、重要な保健課題の解決に向けたエビデンスを示すことを目的としています。

効果的な介入プログラムを策定するためには、単に避妊器具を提供するだけでは十分でなく、避妊の妨げとなる文化的特性や宗教的背景を理解し、女性が避妊具の利用をパートナーに提案できるためのエンパワメントやコミュニティへの効果的なアプローチが必要です。博士課程1年次では、ポジティブ・デビアンسと呼ばれるコミュニティにおける模範となりうる存在の特定、医療提供者へのインタビューなどの方法を用いて、デュアル・メソッドの利用促進に向けた効果的なアプローチの方法を探求しています。今後は、策定した介入プログラムを用いたランダム化比較試験（RCT）を実施する予定です。

フィールドでの実務経験

2018年4月の博士課程の進学と同時に、外務省主催の平和構築人材育成事業の海外研修員として、UNICEF ウガンダにて公衆衛生事業に従事しております。ケニアと類似したバックグラウンドを持つウガンダでのフィールド業務を通して、家族計画や性感染症予防に対する地域住民や医療提供者の認識を包括的に理解できるだけでなく、同分野で活動するNGOや研究者達とのネットワークを構築しながら、研究に関する助言を頂ける機会にも恵まれています。

博士課程の修了後は、アフリカをフィールドに国際保健の専門家として、本研究からの学びを国際機関等での実務に活かしつつ、現場での経験を分析し、論文として発信できる人材になることを目指しています。現在の開発現場における勤務は、国際保健の実務に必要なスキルを向上させるだけでなく、研究と実践の関連や自身の位置づけについて考える貴重な機会となっています。

最後に、国際開発人材育成の観点から、就業と並行した博士過程で研究を支援していただけるFASID奨学金プログラムに大変感謝しております。これらの学びを生かし、国際保健分野の実践と研究の双方において活躍できるよう、今後も努力を続けて行きたいと考えています。



住民グループとの衛生改善に向けた話し合い



開発が進む首都カンパラ市街